

## 論説

# ベトナムの小学校における伝統的な音楽の指導に関する考察 —低学年の導入的な授業の分析を中心として—

嶋田由美

### 1. はじめに

1987（昭和62）年12月の教育課程審議会の答申で教育課程の基準の改善項目の第4点目として「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」が示され<sup>1)</sup>、「音楽の改善の方針」（中学校）においても、我が国の音楽及び諸外国の民族音楽の指導の充実を図る旨が記された<sup>2)</sup>。その後、1998（平成10）年の改訂では中学校3年間における1種類以上の和楽器の学習が<sup>3)</sup>、そして2008（平成20）年の改訂時には「民謡、<sup>ながうた</sup>長唄などの我が国の伝統的な歌唱」の指導が明記されるに至った<sup>4)</sup>。

教員養成分野でのカリキュラムや指導者の準備が整わない中でこうした「我が国の伝統的な音楽」の指導への急速な傾斜は、教育現場でその内容と指導法に関わって様々な混乱や議論を巻き起こしているのが現状である。しかしこの傾向は中学校に留まらず小学校にも顕著となってきており、今後はさらに低学年に及んで伝統的な音楽の指導が重点化されることが容易に予測される。ただでさえ芸術系教科の授業数の削減が懸念される中で新しい教育内容への対応には、校種を問わず今後も引き続き様々な議論や模索が繰り返される気配である<sup>5)</sup>。

本研究は日本の小学校が近い将来直面することが必至の、低学年での「我

(2)

が国の伝統的な音楽」の指導のあり方を検討するために、多文化を持つアジア諸国の小学校での芸術系教科の授業観察と分析を通して、日本の小学校教育への示唆を得ることを目的として開始された研究の一環である。

その中でも本稿では東洋文化研究所で2015～2016年度に筆者が代表者として行ったプロジェクト研究「日本とアジアにおける小学校低学年の自然・生活・伝統文化に関する指導の実態比較」の研究成果を、ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナムと表記する）のホーチミン市内小学校において参観した音楽科授業の考察を中心に報告するものである<sup>6)</sup>。

ベトナムの小学校を音楽科授業の観察および分析対象とした理由については、同国の近年における急速な教育改革と飛躍的な学力の向上はもちろんのこと、南北に長い国土にキン族を中心としながらも50を超える少数民族を抱え、それぞれに多様な伝統的な音楽文化を保持してきた国だからである。このような状況の国においてドイモイ政策以降、教育施策の改革が進み中で、教育訓練省が作成する国定教科書による芸術教科の指導がどのように行われているのかは大変興味深いところである。

## 2. 小学校低学年の音楽科授業の概要

### (1) 低学年の音楽科について

ベトナムの小学校では音楽は必修教科として位置づけられており、あくまで参観できたホーチミン市内小学校の事例ではあるが低学年では週に2時間ずつ配当されていた。本稿で報告する小学校の事例のみならず他の公立小学校、および参考のために参観したインターナショナルスクールの授業においても、音楽科の授業は季節の行事と関連付けられている様子であった。

### (2) 設備と音楽科担当教員について

音楽授業のために使用される教室は各校の事情により様々で、中心部の

小学校では低学年は自クラス内で行われていた。従って児童の周りに楽器が配置されているというわけではなく、音楽的な設備としてはCDプレーヤーが教卓に置かれているのみであった。一方、ホーチミン市にあっても中心部から離れた郊外の小学校では比較的、学校の敷地も広く教室配置に余裕がある様子で、低学年時から音楽室へ移動して授業を受けたり、身体表現を伴う音楽活動の時には校舎に囲まれた中庭に移動して屋外で授業をする場面も参観できた<sup>7)</sup>。

しかしながら校舎内の参観や管理職への聴き取りからは、いずれの小学校においても音楽室内の楽器等の設備は簡単な音響設備やキーボードを除いては、日本と比較しても器楽指導のために十分とは言えないものであった。またベトナムの伝統的な音楽に必須の多様な民族楽器も音楽室内には皆無であり、見学した授業の中で使用されたような代替楽器が児童数分、用意されている程度であった。日本においても伝統的な音楽の指導のために学校にどのような種類の楽器を配備するかは費用と教員の演奏技能などの面で難しい問題であるが、ベトナムにおいてもこの点が音楽科の学習内容を考える上で今後、どのように改善されていくのか注目したいところである。

一方で音楽教室にかかわらずホーチミン市の中心的な小学校では全教室にICT機器が配備されており、参観した2校においても自クラス、音楽室での音楽授業とともにICTを活用した授業を展開しているのが印象的であった。後述するように児童は音楽科の教科書を持参せずに音楽の授業を受けているがICT機器をテンポ感よく活用することにより、授業時間中の児童の集中が常に保たれている印象を持った。

音楽科の授業は低学年においても専科教員によって行われているが、授業後の授業担当者へのインタビューでは教員養成系大学における音楽科教育に関する勉学の内容が日本の教員養成ほどには充実しておらず、楽器演奏経験もほぼ西洋の鍵盤楽器に限られている様子が窺われた。また教員研修の機会も年に数回という程度で、指導案事例も少なく、教材研究は各教

(4)

員がインターネットを使って行っているとのことであった。ベトナムにおいては全般的に教員研修の機会がまだ少ないようであり、日本における各種の研修制度に関しては特に管理職が大変関心を示していた。

### (3) 音楽科教科書の内容構成について

他の教科と同様に音楽科についても教育訓練省が発行している国定教科書が使用されている。本稿で報告する2年生の教科書は写真1のようなものである。

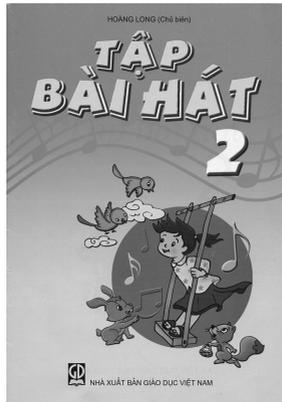


写真1) 小学校2年生の音楽科教科書の表紙<sup>8)</sup>

教科書は1, 2学年用ともに総数44ページ、ほぼB5版の大きさで、わずかにブルー系の色味やイラストが加わった程度のものである。日本の音楽科教科書と比較すると分量や紙質、色合い共に異なるものである。しかし日本の教科書との大きな違いは、以下に詳述するような掲載楽曲の編成や各教材の記載方法と、その教材から発展できる学習の記述に関する点である。

#### 1) 教材の編成

教科書掲載楽曲は1, 2年生用ともに12曲の主教材と13曲の補助教材で編成されている。ここでの補助教材については、「差し替え、または活動外の歌」という注記がされているように、主教材を中心としながらも一部、差し替えなどが授業担当者に委ねられていると推察される。

各学年の主教材 12 曲のうち、本稿の関心事である自国の伝統的な音楽が〈民謡〉という表記で各学年の主教材中に 2 曲ずつ編成されていることは興味深い。1 年次にはヌン族と南部の民謡が、また 2 年次にはタイ族と南部の民謡が、族名も伴って民謡として教科書の楽譜上に記載されている。ただし、〈民謡〉と記載されながら西洋音楽の記譜法である五線譜で表記されているあたりに、伝統音楽の様式をどのように伝えるかという重要な問題が日本と同様にベトナムにおいても見られることは興味深い。

日本の低学年用の音楽科教科書においては現在のところ主としてわらべうたが掲載され、まだいわゆる民謡というジャンルについての扱いが見られないが、ベトナムにおけるこうした小学校初年次からの民謡の指導は日本の今後の低学年の音楽指導上で参考にすべき点である。

## 2) 低学年音楽科の学習領域

ベトナムの低学年音楽科の教科書の体裁は、1 教材につき次項で示す譜例 1 のような楽譜と反対のページにその歌詞という、見開き 2 ページの構成であり、教科書の中には楽典事項や器楽の指導に関する事項、さらには関連する鑑賞教材などに関しては一切、記述が見られない。参観した数回の授業では ICT 機器を使った民族音楽の視聴の場面などもあり、歌唱を主としながら他領域の学習活動へと展開することは、教員の力量や教材研究如何であるように推察される。しかしながら計 4 名の音楽科教員による授業を参観した印象としては、いずれの授業も基本的には教師用指導書の記載に沿って進められているように感じたのも事実である。

なお今回収集した音楽科教科書では 4 年生になると音名や音価、リズム、民族楽器などの指導事項が記載されており、低学年で歌唱を中心とした活動から児童の音楽的発達に伴って楽典事項や他の活動領域へと指導が展開されていく様子が窺われる。

児童は新学期が開始されるとすべての教科書を購入して持参することが原則となっているようであったが音楽科の授業に関しては今回参観した授

(6)

業では、児童が自身の教科書を取り出す場面は見受けられず、教師が提示するスライド上の楽譜や音源に基づいて授業が行われていた。

### 3. 2年生《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》の授業の分析

#### (1) 授業の概要

本稿の考察にあたり参観対象とした音楽の授業は下記の通りである。

日時 : 2016年9月9日(金) 2校時

学校名 : Lê Văn Việt 小学校<sup>9)</sup>

学年 : 2年生 (32名)

教室 : 音楽室

机の配置はコの字型

あらかじめ各机の中に児童用楽器が準備されている。

主教材は《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》(13ページ)(譜例1)(資料1)であり、参観当日は2時間配当の本教材の指導の第2時間目に相当する授業が行われた。

この教材の指導目標や準備物等に関しては、教師用指導書<sup>10)</sup>に以下のように示されており、本時の授業は、指導目標の後段の「民族打楽器の名称や形状を理解し、楽器の知識を深める」に該当するものであった。

## Cộc cách tùng cheng

Nhạc và lời : PHAN TRẦN BẢNG

Hơi nhanh - Vui

Sênh kêu nghe tiếng vui nhất cách cách cách cách cách  
cách. Thanh la kêu tiếng rất vang cheng cheng cheng cheng cheng  
cheng. Mõ kêu nghe sao đỉnh đặc cộc cộc cộc cộc cộc  
cộc. Trống kêu rộn rã tùng bùng tùng tùng tùng tùng tùng  
tùng. Nghe sênh thanh la mõ trống cùng kêu lên vang  
vang cùng kêu lên vang vang. (Nói): Cộc cách tùng cheng.



13

### 譜例 1) 《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》の楽譜

センは一番楽しい音が鳴る  
カイクカイクカイク！カイクカイクカイク  
ティン・ラはととも響く音が鳴る  
チェーンチェーンチェーン！チェーンチェーンチェーン  
木魚はなんとも堂々とした音が鳴る  
コックコックコック！コックコックコック  
太鼓は賑やかな音が鳴る  
トゥーントゥーントゥーン！トゥーントゥーントゥーン  
セン、ティン・ラ、木魚、太鼓を聞けば  
共に鳴り、響き合う  
共に鳴り、響き合う  
(言葉で言う)：コック・カイク・トゥーン・チェーン

### 資料 1) 《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》の訳詞

(8)

指導目標<sup>11)</sup>：正しい旋律で暗唱し，曲想を表現する。

リズムや歌に合わせた動き，ゲームを交えた歌唱の練習をする。  
楽曲をさらに好きになり，自信をもって歌唱できるようにする。  
民族打楽器の名称や形状を理解し，楽器の知識を深める。

準備物<sup>12)</sup>： 教員の準備：身近な楽器・打楽器・楽器のイメージ図や民族  
打楽器の絵・写真，CD プレーヤ  
児童の準備：打楽器<sup>13)</sup>

実際には参観当日は，教師は主にシン・ティエン<sup>14)</sup>を用いて指導を行い，児童用には各机の中にあらかじめクラベス（写真2）・小太鼓・モーコック（写真3）・ソンロアン（写真4）・小さいドラの中から一つずつの楽器が準備されていた。これらの楽器は市中の楽器店などでも購入が可能のものであり，なおかつサイズの的にも低学年児童が扱いやすい大きさのものである。伝統的な楽器の準備が困難な状況にあって，奏法や音色が似通ったこの種の楽器の準備は，日本においても大いに参考になるところである。



写真2) クラベス



写真3) モーコック



写真4) ソンロアン

当日参観した授業の概要を日本の学習指導案の要領で示すと資料2の通りである。

時間	学習活動と内容	教師の支援・手だて
0分	○前時の復習 ・楽曲名と作曲者名の確認	前時の学習内容を確認する。
1分	○母音唱	手の動作で母音の形を示す。
3分	○《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》の歌唱練習 ・クラス全体で歌う。 ・グループで歌う。 ・一人で歌う。	本時のめあてを提示する。 CDプレーヤを使用して歌唱を促す。 各歌唱に対するコメントを促し、拍手をするように言葉掛けをする。
13分	○《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》の器楽練習 ・楽器の奏法を確認する。 ・歌唱に合わせて各自のパートを打つ。 ・伴奏に合わせて歌いながら演奏する。	各児童に楽器が配布されているか確認する。 奏法を説明し、音を出すように言葉掛けをする。 一緒に歌唱しながら楽器を打って指示をする。
27分	○民族楽器の学習 セン、シン・ティエン、ドラ、モーコック、木魚、 各種の太鼓について教師の説明とスライド、 動画を使って学ぶ。	ICT機器を用いて楽器の名称や音色を説明する。
34分	○民族楽器の演奏の動画の視聴	北部の民謡の説明をする。
36分	○民族楽器の復習 ・スライドを使って確認する。	スライドにより8種類の民族楽器の復習をする。
40分	○本時の振り返り	本時の全体の内容を確認させる。

### 資料2) 《CỘC CÁCH TÙNG CHENG》の授業の概要

授業概要の記録に見るように本授業は、日本の小学校における一般的な授業計画とほぼ同様の構成で展開されている。すなわち、前時の復習や母音唱を含めた導入と、本時の中心的な歌唱と器楽の演奏活動、そして本時の振り返りという構成である。しかしながら指導の方法以外にも教科書の扱いや教室の形態を含めて様々な点で異なり、同時に日本でも参考にするべき点が見いだせたので以下に検討を加える。

(10)

## (2) 授業の分析

### 1) 教室の形態・教科書・準備物について

参観した本授業は、小学校2年生という低学年であったが日本のように自教室ではなく、音楽室を使用して行われた。ホーチミン市中心部の他校の参観の折には低学年の音楽や美術などはすべて自教室内で行うと説明を受けていたが、同校では前年度の参観の折にも特別教室を使用しており、芸術教科の教室は各校の事情によっていると推察される。特に本時の授業では、楽器を演奏する活動が主で、グループの代表が児童の前に出て交互に演奏する場面も組み込まれており、こうした活動のためには低学年から狭い教室ではなく、活動に適したスペースでの学習が効果的である。

参観時のクラスは児童数が32名であり、教師の立ち位置に対して2列のコの字型で机が配置されていた。事前に座席は決められている様子で児童の入室後、速やかに授業が開始された。児童は教室からの移動に際して何も持参しておらず、この点が低学年でも教科書や鍵盤ハーモニカ、筆記用具をバッグに入れて教室移動を行う日本の小学校とは異なる印象を受けた。

教室の前方には従来型の黒板が設置されているが、本授業はその隣に新しく設置された電子黒板のみを用いて行われ、教師が授業の進行に応じて適宜、必要事項を板書するという場面は参観できなかった。児童は先述のように教科書はもちろん、筆記用具やノートを持参しておらず、従って教師の注意や自身の気づきを教科書やノートに書き込むという場面も見られなかった。

### 2) 全体から個へという指導上の工夫

導入にあたる母音唱のあとに始まった歌唱指導では電子黒板上に「歌唱復習」という表記とその下段に「全員で歌う」「グループで歌う」「一人で歌う」という歌唱形態の指導の順序が示された。そして教材曲を、CDプレーヤからの音源に合わせてまずクラス全員で、次にコの字型の机配置の一方

向ずつのグループで歌唱したが、教師は歌唱が終わる都度、児童に感想を求め、また「上手に歌えたので拍手をしましょう」と児童に促した。その後の「一人で歌う」指導では挙手により選ばれた児童が教室の前方に出て交替で歌唱する場面が見られたが、この際に32名という1クラスの人数にもかかわらず、マイクを使用していたことは大変印象に残る場面であった。ホーチミン市内の小学校ではこの学校に限らず他校でも教室内のマイク使用はしばしば見受けられることではあったが、音楽科の授業におけるマイク使用は多少なりとも違和感を覚えるものであった。

このクラス全体、グループ、そして個人での発表という形態は、続いて展開された身近な楽器を使った指導の中でも活用されており(写真5, 6)<sup>15)</sup>、児童に自立して演奏できる態度を自然な流れの中で育成しようとしているように見受けられた。

### 3) 代替楽器使用の工夫

伝統的な音楽の指導の場合、日本においても高価な和楽器や民族楽器などをどのように準備するかということは大きな課題であり、この分野の指導がなかなかスムーズに展開されない一つの要因にもなっている。その点で、参観した本授業における、児童の身近な楽器を代替楽器として用いた指導は大変示唆的なものであった。

本教材は資料1の訳詞にも見られるように、ベトナムの伝統的な打楽器を歌詞の題材としたものである



写真5) クラス全員で歌いながら打楽器を打つ



写真6) グループの代表が異なる楽器を演奏する

(12)

が、管理職へのインタビューでもこれらの楽器を一般の小学校で準備できるのには限りがあるとのことであった。実際に市販されている教師用指導書においても先述のように、「児童の準備」としてクラベス、ソンロアン、小太鼓などの手に入れやすい楽器が示されている。

本授業では32名の児童が、資料1の歌詞中のセンの代替としてクラベス、ティン・ラとして小さいドラとソンロアン、木魚にはモーコック、太鼓の箇所には小太鼓を使って、各自が手にした楽器の名称が出てくるフレーズを歌いながらその楽器を打つという活動が見られた。歌詞に見られる楽器に比較的近い構造や音色を持つ代替楽器により、この歌唱教材が器楽の指導と民族音楽の指導の導入にもなり得ていたことは興味深い。

#### 4) ICT 機器の活用の工夫

授業はすべて教師が操作する ICT 機器を活用して展開されたが、授業の後半ではインターネット上の教材や動画を使用して、前述のような代替楽器で得られた音色などの知識を、実際の伝統的な楽器と結びつける形の復習が行われた。

画面に映し出されたセンやドラ、木魚などの名称を一人ずつ指名しながら答えさせ、楽器の素材や構造についての説明を加え、実際の音色も確認させた。またその後には北部の民族による民謡の演奏の動画が流され、その中でソンロアンの楽器についても素材や構造、演奏方法の確認がなされた。授業の復習の段階では本時の振り返りとして、スライドを使って合計8種類の楽器の名称の再確認も行われたが(写真7)、楽器の名称や音色を歌詞に含めた歌唱教材と簡易な楽器での演奏経験に加えて、スライドを使った確認の学習により、児童の伝統的な楽器への理解が



写真7) 8種類の伝統的な楽器を確認する

深められるような手立てとなっていることを実感した。

### (3) 日本の小学校と共通する課題

前述のように、参観した授業からは低学年における伝統的な音楽指導の導入として多くの示唆が得られたが、一方で音楽科の指導の上で日本の小学校が抱える問題とも共通した課題も見いだされたので以下に考察を加える。

#### 1) 音楽教育の本質的な課題

本時の授業はこの教材の2時間目の指導にあたるものであり、当然、前時の学習では歌唱指導が行われたと推察できるが、児童の歌唱は必ずしも楽譜上に記された旋律を正しく歌うものではなかった。たとえば、譜例1の第4小節第2拍目から第5小節にかけてのA-A-A-C-C音を児童のみならず担当教員も、G-G-G-A-Cという音程で繰り返し歌唱をしていたが、これは本稿執筆にあたりあらためて記録した動画を見直した際にも気になった点である。いわゆる〈民謡〉と明記されたものであれば、歌う個人により旋律やリズムが異なる箇所も多いはずであるが、本教材は作詞・作曲者名が示された教材である。あるいは、〈民謡〉ではなく作られた楽曲ではあるが、伝統的な音楽への導入的な指導という観点から、あえて音程のことには触れずに、楽器の名称や響きを模した歌詞を重点的に指導をしていたのかも知れない。

実は他校の第1回目の訪問時に参観した3年生の音楽の授業ではタイ族の〈民謡〉《NGÀY MÙA VUI》(3年生の教科書16～17ページ)を教材としていたが、ここでは児童の音程の間違いを教師が、その前後2小節分を抽出して何度も正す場面を参観したことがある。この箇所は一般的に音程がとりにくい箇所と考えられているようで、教師用指導書にはこの小節の音程の間違いを指導する旨が明記されており、参観した授業でも教師は指導書に則って音程の間違いを児童に気づかせ、正しい音程での歌唱を指導していたと考えられる。すなわち、〈民謡〉の指導でも音程の正確さが

重視される授業がある一方で、作詞・作曲者名が明記された教材であっても正しい音程での歌唱よりは表現が重視される指導も行われているということである。

ところでこの点は、日本の音楽教育においても様々な考え方があるところである。特に小学校低学年の音楽教育の場合には、まず音楽に親しむという観点は共通しながら、その中で楽典的な指導や歌唱、器楽の技能をどのように身につけさせるかは対象とする児童の様子によって色々な考え方がある。さらに〈民謡〉に至ってもいったん、教科書教材となってしまうえばそれを「指導」するのか、あるいは〈民謡〉という本来のあり方を重視してあくまで歌唱者の歌い方を尊重するのかはベトナムの音楽教育においても今後、大きな論点になっていくのではないかと考える。

さらにそこから波及して、今後、〈民謡〉教材をどのような形で扱っていくべきかという点も再考される時期が来ると予測される。日本においても、わらべうたや和楽器の旋律がいわゆる西洋音楽の記譜法による楽譜で示されることに関しては、これまでも様々な議論が展開され、近年は各々の音楽が本来持っている様式がより重視される傾向にある。近代的な学校教育が整備される中で伝統をどのような形で児童に伝承させていくかという点は両国の間にも共通した課題として残されているように思う。

## 2) ICT 機器の過度な使用について

もう一点、参観した授業から ICT 機器の使用について今後、考えるべき課題が見いだされたので記しておきたい。昨今、日本の小学校の音楽科の授業においても ICT 機器の活用が推進されているが、ややもすると声そのものが持っている特性や楽器の音色への教師自身の気づきが薄れているのではないかとさえ感じられる。たとえば、歌唱の伴奏において教師のピアノ演奏よりは CD を使用する傾向にあること、あるいはビデオなど視覚教材の多用などである。児童の歌唱の様子に合わせた教師のピアノ伴奏で生み出される表現の可能性や、視覚ではなく聴く力を重視した指導によ

る音楽性の育成と、CDの伴奏に合わせることから得られる教育的効果を秤にかけることは確かに困難である。しかし、音楽科本来の声や楽器の音色を大切にしたい授業について再考すべき時期ではないかと考える。

この点に関しては今回、参観した授業では教師の指導のみならず一人ずつの児童の歌唱にもマイクが使用されていたが、その意図や必要性について機会があれば問うてみたい。この学校だけではなく他校でもマイクを使用した他教科の授業を参観する機会が多く、ベトナムでは一般的なこともかも知れないが、特に音質を重視すべき歌唱指導では考えるべき課題ではないかと考える。

#### 4. おわりに

本稿の考察のために参観した小学校はベトナムのホーチミン市という都市部にあり、規模的にも大きくまた優秀な教員が集められている小学校であり、これをもってベトナム全体の音楽教育を語ることは到底、不可能である。しかし授業後の管理職や授業担当教員へのインタビューなどを通じて、自国の伝統的な音楽文化の伝承の意義と必要性を感じている様子は窺われた。しかし一方で、教育の飛躍的な近代化の中で教員養成でのこの分野の指導が遅れていることも事実である。前述のように本稿で考察した授業の担当教員は、教員養成系大学での伝統的な音楽の授業が皆無であったこと、校外での教員研修が1年に1、2度程度しかなく不十分であること、学校での楽器の購入も簡易楽器に限られていることなどを語っている。そのような状況の中で、教師自身がインターネットを使って教材研究を行っているとのことであった。

もちろん教師用指導書も市販されているが、あくまで授業の流れに沿った教師側からの設問、想定される児童の反応、それに対する次の指導という段階を追った記述が中心のものであり、たとえば、一つの教材から発展

(16)

できる楽典事項、器楽指導、音楽史、文化的背景などに関する事項は低学年では殆ど見られない。従って、内容的に充実した指導書が準備されている日本の音楽科教師と比較して、ベトナムの教師には一層、自身の音楽的力量と研鑽が求められているとも言えよう。

今回参観した授業の後半部の指導の流れ自体は、教師用指導書にかなり準拠したものであり、前半の身近な楽器を代替的に使った器楽指導に比べると、知識注入型の指導の趣が強いものであった。この教材の指導目標が「民族打楽器の名称や形状を理解し、楽器の知識を深める」ことにある限りにおいては、この指導法は十分に機能していたようにも思われるが、ここで得た知識が児童の音楽文化的な生活にどのように寄与していくのかということに関しては、今後の指導の展開を見て再検討したいと考える。

考察してきたように、日本とベトナムという異なる音楽文化的な背景を持つ両国においても、小学校低学年での伝統的な音楽の指導自体には共通する課題が残されていると考えられ、継続的な研究推進の必要性を感じる。

謝辞：本研究にあたっては学校参観許可に関する関係各所への手続きや通訳などでホーチミン市国家傘下大学人文社会科学大学の Vu Doan Lien Khe 先生に大変お世話になりました。そのお力添えに心より感謝申し上げます。また Lê Văn Việt 小学校の Pham Ngoc Lan 校長先生をはじめ教職員の方々、同時に参観させていただいた Luong Thê Vinh 小学校の先生方にもお礼を申し上げます。

#### [注]

- 1) 国立教育政策研究所『教育課程の改善の方針、各教科等の目標、評価の観点等の変遷—教育課程審議会答申、学習指導要領、指導要録（昭和22年～平成15年）—』2005年 p.18 参照。
- 2) 同上。p.253 参照。

- 3) 大蔵省印刷局『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）』1998 年 p.63 参照。
- 4) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』2008 年 p.82 参照。
- 5) 実際に 2017（平成 29）年 3 月に公示された小学校用の新学習指導要領では、改訂の基本的な考え方の一つとして「我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるよう、和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習の充実を図る」旨が示され、かつ、従前、第 5 および 6 学年において取り上げる旋律楽器として例示していた和楽器を、第 3 および 4 学年にも新たに位置づけることとなった。（2017（平成 29）年 6 月「小学校学習指導要領解説 音楽編」参照。http://www.mext.go.jp/component/a\_menu/education/micro\_detail/\_icsFiles/afieldfile/2017/08/02/1387017\_7\_1.pdf 2017/9/24 閲覧）
- 6) ホーチミン市内小学校の授業参観は、2015 年 9 月 10～11 日、2016 年 9 月 8～9 日、2017 年 3 月 14～15 日の 3 回行った。いずれの回も初日に Lương Thế Vinh 小学校、2 日目に Lê Văn Việt 小学校を訪問し、音楽や美術などの芸術教科を含む 4 時間ずつの授業参観と、その後に管理職や授業担当者へのインタビューと意見交換を行った。
- 7) 2017 年 3 月 15 日に参観した Lê Văn Việt 小学校における 3 年生の《CHI ONG NÂU VÀ EM BÉ》の授業では、主活動が、歌いながら歌詞に書かれた蜂の動きを教師の振り付けに合わせて踊るというものであった。この授業は中庭の木陰で CD プレーヤを用いて行われた。
- 8) HOÀNG LONG (2015), *TẬP BÀI HÁT*, NHÀ XUẤT BẢN GIÁO DỤC VIỆT NAM.
- 9) ホーチミン市中心部から車で 40 分程度の校外にあり 12,000㎡の敷地にサッカー場やグラウンドを有する大規模な小学校である。9 区内の全小学校に ICT 機器が導入済みで同校でも企業による ICT 研修が行われている。住所：MAN THIÊN, TẶNG NHON PHÚ, DISTRICT 9.

(18)

10) LÊ ANH TUẤN (2012), *HƯỚNG DẪN GIẢNG DẠY THEO PHƯƠNG PHÁP DẠY HỌC TÍCH CỰC môn Âm nhạc*, NHÀ XUẤT BẢN ĐẠI HỌC SƯ PHẠM.

11) 同上。p.59 参照。

12) 同上。

13) 指導書には児童が準備する打楽器類としてクラベス、ソンロアンや小太鼓が例示されている。

14) ベトナムの木製の民族楽器。日本語ではセン・ティエンと表記されることもある。

15) 小学校の授業風景の写真使用に関しては、同校の許可を得ている。